

大智禪師偈頌

鳳山山居

(その二)

一心の旅路一

大智禪師山居の郷より

大智禪師偈頌

鳳山山居（その二）

截断人間是与非 人間の是と非とを截断せつだんして

白雲深処掩柴扉 白雲深きところ柴扉をおおう

当軒栽竹別無意 軒に当つて竹を栽ゆ別に意なし

祇待鳳凰來宿時 ただ鳳凰来宿の時を待つ

大智禪師二十年山居の勝跡を志慕して、山に入るのはよいが、山に居住する真の意義を知らなければ無意味なことになるばかりでなく、大変な過ちを犯すことになる。

雲兄水弟。遙かに家郷をさり、永く親族をすて、名利も是非も總て相管せざして細々の行履、條々の威儀、すべからく勤学すべしと雖も、先ずまさに仏祖一件の事を学ぶべし。謂ゆる居山なり。

道元禪師はこのように雲水修行僧に対して懇切なご教示をくだされている。

人間の是非・善惡・利害・得失等を遠く退けて山に入り行持綿密におこないすまして眞面

目に修行するということは、実に立派なことではあるが、それだけではいけない、
まことに仏祖一件の事を学すべし。

仏祖一件の事とは修行の最要のことである。これを明らめておらなければ、何にもならぬ
いどころか、先聖にそむき仏法を滅亡させることになる。ではその一件の事とは何か。それ
は「居山」ということである。山の実相を明らめ山に居住することである。

「山」の真実を究め尽したら“参学の大事”ここに終り、仏道の極地に達したことになる。

山に居住すれば、善惡是非、順逆生死等の人間の世界を断ちきつて寂然不動、心が山の如
くなるのだと、或は山に居住して世間俗界の塵勞欲望から離れるのだというようなことを
考えていたのでは、とんでもない誤りであると教諭せられているのである。

大智禪師が塵煙遠く離れた鳳山に住まわれたのはそのような所謂の小乘根性で世間を逃避
された訳では決してない。真に国をおもい眞の平和な繁榮を希えればこそのことであり、純忠
菊池氏に期待すればこそその山居であつたのである。

国家に真実の仏法弘通すれば、諸仏諸天ひまなく衛護するがゆえに王化太平なり。聖
化太平なれば、仏法そのちからをうるものなり。

この道元禪師のお言葉はそのまま大智禪師に正伝されている。従つて鳳山二十年の山居は、

大乗菩薩の山の生活であり、高広なる山の諸功德を雲に乗り風に順つて縦横自在に究め尽されたというべきである。

人間の是と非とを截断して

白雲深き処、柴扉をおおう

これは実は仏祖正伝の坐禅のことを述べられているのである。兀々不動の山のごとき坐禅の姿勢は、おのずから是非等の一切の二見相対の人間世界を超越して、尽天地と一体に活動する仏の徳を具現しているのである。

当軒、竹を栽ゆるに 別に意なし

竹を栽培して、どうするという企画はない。竹のように虚心坦懐、無心である。實に竹は君子であり坐禅人である。

ただ待つ、鳳凰来宿の時

竹の実が熟すれば鳳凰が来るという。鳳凰は瑞鳥である。群鳥これになびき平和な繁栄をもたらすという。竹実にあらざれば食わず、醴泉にあらざれば飲まず、梧桐にあらずんば棲まずという。この鳳凰（素晴らしい後継者）の来宿を待望するというのである。因みに鳳来の村名はこの偈による。

今、鳳儀山聖護寺は鳳凰児の来宿を待つてゐる。